

@幸せな贈り物

「だいじょうぶ」あなたは、あなたの人生の 主演 だから…

せいで「ママの干渉のせいで、両親の不和のせいで、もうそろそろあきらめたいです」

外国に留学中だったそのエリートとの対話はこのように始まりました。

「そうか。大変だったね。あなたは映画を見たことがある？」「はい」

「それでは、助演と主演の違いを知っているよね。主人公が簡単に死ぬこと見た？」「いいえ」

「だれでも一度の人生を生きていくのに、なぜこれほど違いがあるのだろうか。それは、私が私の人生を主演で生きていくか、助演で生きていくかの差だと思うよ。私がもし私の人生の主演であることを分かったら、私に与えられるすべての出会いと環境が成功のためのもう一つの土台になるだろうけれど、私がもし私を私の人生の助演だと思って生きていったら、私に与えられるすべての出会いと環境は、ただ私の生活の障害物だけだろう!『せいで』ということばは、おもに助演が使うことばで『たとえ〜であっても』ということばは、主演が使うことばだ。あなたは、あなたの人生の主演だと思っているの、助演だと思っているの？」彼はなにも言わず私を見つめていました。

紙一枚も、どこにあるかによって完全に違った結果がもたらされます。

「今、あなたの目に見える紙一枚、一枚だとこの紙はだれでも破ることができる。しかし、この紙が壁に会う瞬間、だれも破ることができない背景を持つようになるだろう。いま、あなたにやってきた苦難と危機がそのような壁ならばどうするのか。そして、あなたの両親があなたの人生の背景になる壁ならば、どうするのか。よくしてくれて、条件に合う立派な両親があなたのそばにいてくれれば良いだろうけれど、それでも、それはあなたの人生の賛助出演に過ぎないのだよ。本当に重要なのは、あなたがあなたの人生の主演だという点!それ一つだけでもあなたは十分に成功する資格があって、幸せになる条件を持っているのだよ!」彼の瞳に希望の光がよみがえります。

「今からあなたの人生の主演で生きていきなさい。あなたに迫ってくる全てのものは、主人公を引き立てて見えるようにさせるためにしばらく来て行くだけだよ。結局、あなたの両親とあなたに与えられるすべての出会い、環境は、あなたのための素敵な賛助出演なんだよ。なぜなら、あなたはあなたの人生の主演なのだから!」

今から新しく始めてみないか。

「人々は、人生で幸せな生活を送るのに多くの条件と出会いを話すけれど、うつわの価値はその中に何を入れているかによって変わるのだよ。私は、あなたがとても大切に見える。なぜなら、あなたはすでに世の中で最も大切なものを抱いているから。世の中のどんなものも倒せない『その秘密』をすでにあなたは知っているではないのか!」

その秘密さえ分かれば、苦難も結局は祝福のためのものだ。

「こういう話を読んだことがあるかな。静かな島国ニュージーランドには飛ぶことができない五種類の鳥がいるのだけれど、『キーウィ、フクロウオウム、タカヘ、モア、ダチョウ!』だ。なぜ飛べなくなったのか知っているかい。彼らを取って食べる天敵の危険が全くなかったためだそうだ。だから、飛び回る理由がなかった。人生は夢と勇気のために飛び上がるのではなく、試練と逆境が人生を飛び上がるようにさせるのだよ。人間は苦難がない安らかな人生を追求するが、苦難がなくて安らかさが与えられれば、夢に向かう感覚が麻痺するのだ。それで、苦難は人間が空に飛び上がるようにさせる神様の後押しだということばもあるだろう。夢と逆境があるので、それだけ私たちの人生が大切だということだ」

一度の出会い、一度の対話が人を生かしたり、殺したりもします。しばらくしてから、連絡がきました。

「私が私の人生の主演であることを分かるようにして下さって感謝します。そして私の永遠な背景であるその方とともに新しくはじめさせて下さって感謝します。一度の出会いが私には人生の転換点 Turning Point になりました」

土の器に入っている宝、私たちの人生はだれでも足りなくて、苦難の前にさらけだされています。

しかし、そのどんな苦難と危機も祝福になる秘密があります。そのエリート留学生が握って新しく人生を挑戦できたその秘密は、ひとことで「インマヌエル」でした。人間に永遠な幸せ、完全な幸せ、まことの幸せの背景になるその秘密、まさに「創造主なる神様、全能者の神様が私とともにおられること」です。

その道が「キリスト」です。

その方は十字架の苦難と死、復活を通して、人間が解決できない運命と運勢を解決してくださいました。罪の欲望による呪いと、その中にかくされた暗やみの働きを解決してくださいました。

そして、神様と永遠にともにいる幸せの道を開いておいてくださったのです。

「神を愛する人々、すなわち、神のご計画に従って
召された人々のためには、神がすべてのことを働かせて
益としてくださることを、私たちは知っています。」

(ローマ人への手紙 8:28)



人間の 方法 神様の 願い

ミャンマー宣教の父と呼ばれるアドニラム・ジャドソン Adoniram Judson も神様の存在を否定して、神様を離れたことがありました。それは、アメリカのブラウン大学に通っていた最も親しい友人の影響でした。首席で大学を卒業したのですが、その友人との出会いは神様を離れるようにさせました。

友人であったリーは、アドニラムといつも神様がおられるかという問題で言い争いました。「いや、神様は本当におられるならば、ある人は黒人にして、ある人は白人にして、人種差別をするようにさせるのか、目に見えない神様とたましいがあるならば科学的に証明してみてくれ。目に見える人も信じることができないのに、どのように見えることもない神様を信じられるのか。イエスが神様の息子ならば、なぜくやしう十字架に釘付けられて、そのまま死ぬようにされたのか」悩んだアドニラムは、結局、神様を離れて自分自らの人生を楽しみながら生きていたのですが、そうしている途中、西部の小さい旅館に泊まるようになりました。ところで、彼が泊まった隣室で青年一人が死にそうだという事実を知ることになり、夜中に悪夢に苦しんで、根本的な質問を投げることになりました。「死んでいくあの青年は死に対する準備ができていのだろうか。心臓の鼓動が止まる瞬間、彼にどんなことが起きるのだろうか。人は死んだらどうなるのだろうか」その次の日、フロントで隣室の青年が死んだという事実を知ることになったのですが、さらに衝撃的なことは、その青年が、まさにブラウン大学に共に通った友人のリーだったのです。

友人リーの死の前で、アドニラムは人間が自分の力で生きていくという方法は誤っていることを悟ることになりました。そして、神様の前に立ち返って、このように質問を投げました。「神様、私は誰のために、何をしながら、神様が与えられた人生を送れば良いのでしょうか。私の残った一生をどこにささげれば良いのでしょうか」結局、彼はアメリカの大きい教会が提示した良い条件の招請状を拒絶して、誰も行かなかったミャンマーに入って、一生、福音を伝えながら生きました。アメリカのマサチューセッツ Massachusetts にある彼の記念碑には、このように書かれています。「無知な人々を悔い改めさせたミャンマーのキリスト者と、彼が翻訳したミャンマー聖書が彼の記念碑となる。彼の業績と履歴は天国にある！」

十戒の中の第三戒を見れば「あなたは、あなたの神、主の御名を、みだりに唱えてはならない。主は、御名をみだりに唱える者を、罰せずにはおかない。」と言われました。しかし、神様の人間に向かった根本的な願いは、刑罰ではありません。聖書の核心は、福音を通した人間の救いを語っておられます。神様は死んだと空に向かって銃を撃った共産主義は、70年後に自ら幕を下ろしました。聖書はこのように宣言します。「愚か者は心の中で、「神はいない」と言っている。彼らは腐っており、忌まわしい事を行なっている。善を行なう者はいない。」(詩篇 14:1)「十字架のことばは、滅びに至る人々には愚かであっても、救いを受ける私たちには、神の力です。」(1コリント 1:18) それゆえ、私たちには福音が必要なのです。

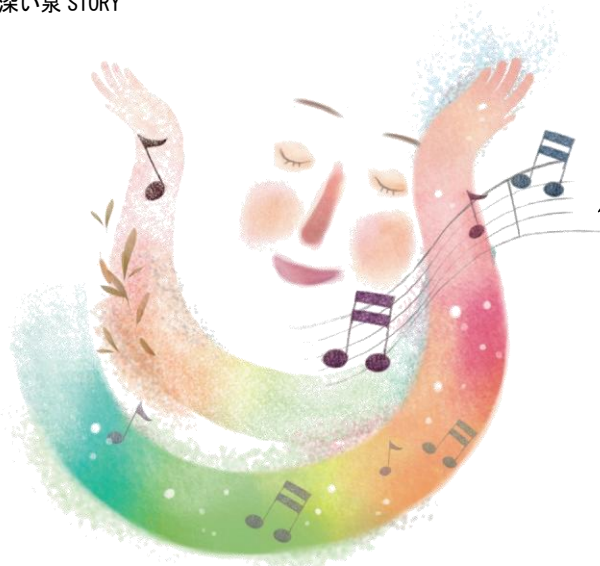
「まことに、まことに、あなたがたに告げます。わたしのことばを聞いて、わたしを遣わした方を信じる者は、永遠のいのちを持ち、さばきに会うことがなく、死からいのちに移っているのです。」(ヨハネ 5:24)

神様の子どもになる 受け入れの祈り

愛の父なる神様。私は罪人です。今まで神様を離れ、サタンの支配の下に縛られて、奴隷のように生きて来ました。しかし、今、この時間、イエス様を私の救い主、私の神様、私のキリストとして受け入れます。イエス・キリストは、神様に会う唯一の道であり、サタンの権威を打ち砕かれ、すべての罪とのろいと災いから私を解放してくださったキリストであると信じます。いま、私の中に入れて来てくださり、私の主人になってください。今から私の生涯を細かく導いてください。イエス・キリストのお名前によってお祈りします。アーメン

神様の子どもの 毎日の祈り

父なる神様、イエス・キリストによって神様がいつも私とともにおられて、導かれることを感謝します。今日も、すべての生活の中で、神様の子どもになった祝福を味わうように、聖霊で満たしてください。私の家庭と現場と行くところごとに福音を邪魔して困らせるすべてのサタンの勢力を権威あるイエス・キリストの御名で縛ってください。どんなこと、どんな問題でも、解決者であるイエス・キリストに任せて、その中で神様のより良い計画を発見しながら、聖霊に導かれる生活になりますように。そして、私の生活を通してイエス様がキリストであるということがあかしされ私の現場に神の国が臨むようにしてください。毎日、私の生活の中で神様の願いである世界福音化の契約を握って勝利できますように。今も私とともにおられるイエス・キリストのお名前によってお祈りします。アーメン



イラスト_イ・チャン

休む日の危機

人々は、みんな忙しく生きている。仕事に集中してみても良い未来を開くために多くの努力を傾ける。それで、世界は日々変化して発展している。しかし、こういう忙しさも、ある程度の時間が過ぎれば、休まなければならない時間になる。普通6日仕事をして1日休むのがこれまで一般的慣例だったが、この頃は、5日仕事して2日休むことで全世界が進んでいる。学生ならば、休む日が多ければ良くて、疲れる人々も休む日が多くなれば良いだろうが、雇い主は、時間がすなわち金なので、そんなにすぐに歓迎することではないようだ。それでも、とにかく仕事をする日が一日減って、休む日が一日増えたことは歓迎すべきことだ。

神様が世の中を創造されたとき、人間が6日間仕事をして、1日休む日に定められた。これが西洋の生活の規例になって、すべての世界の人々がそのようにすごしている。その一日の時間の休みは人間のための時間だが、実際には神様のための時間だ。神様が6日間天地を創造されて、その次の日に休まれたためだ。神様は6日仕事をして1日休まれたが、人間は創造されるやいなや、その次の日から休むことに入った。神様は人間を仕事をする存在として造られたのではなく、休む存在として造られた。一日の間の休みを通して、神様のすべて、すなわち、神様のかたちと創造のすべての祝福を味わった後に、新しい6日を楽しむ祝福を味わうのだ。したがって、人間は神様が準備しておかれた創造の下でだけ可能な休みを味わえる存在であった。

神様を離れた人が、彼らだけの人間の世の中になったとき、人間はそれ以上、休む存在ではなく、仕事をする存在になった。それで、神様がそうだったように6日仕事をして1日休む、難しいことを果たすようになったのだ。一日を休むということは、肉体的に安静にするのではなく、彼を造られた神様を

思って礼拝する日に定められたのだ。神様を離れた休みは、絶対に平安はない。

アウグスティヌスは「私はキリストのなかで休むまで、私にはまことの平安はありませんでした」と告白した。神様を離れた人間は、神様のかたちを離れたのであるから、絶対に休みを味わえない存在だ。しかし、キリストは神様のかたちであるから、キリストを受け入れた人だけがまことの休みの場に入ることができる。人間がまことの休みをなくしたのを回復するのだ。ところが、神様を離れた人間の状態は、休む機会を通して、なくしたものをより一層遠くにしてしまう失敗を繰り返している。

デカルトは「動物は食べて生きるためにだけ動く単純な自動機械」に過ぎないと言ったが、人間として造られた存在が、まことの休みを知らないならば、動物の水準である。1週に2日を休むようになれば、余裕は多くなる。動物と違う人間は、このような休みの機会を、お腹がいっぱいになることと、お腹がへるものの本能的な交差点で、上がったたり降りたりすることを繰り返す生存に留まる休みだけを持つのは望ましくない。

人は動物ではないので、お腹がいっぱいでもあっても疲労とも関係なく、人は休む機会を通して神様に会って、神様を礼拝すべきだ。2日の休みの中で5日が私のための時間だったら、残りの休みの時間は神様のための時間だが、天国を貯蓄する時間であるから区別されなければならない。ある日、私の時間がすべて過ぎたとき、神様に貯蓄しておいた時間がないならば、その人は永遠に休むことができないだろう。一つ記憶すべきことは、神様に貯蓄しておく時間の利子は、不平等契約で利子が永遠に計算されるということだ。休む日を遊ばずに神様の時間で礼拝を貯蓄するように願う。

チョン・ヒョングク (福音コラムニスト)

* 相談したい方はこちらまでどうぞ